

お茶うけ 第78話

山の緑、人の暮らしと治水 河川技師デ・レイケ その3

先に述べたように、オランダ人河川技術者ヨハニス・デ・レイケ(Johannis De Rijke)は 1873年(明治6年)に来日し、仲間のファン・ドールン(Van Dooren)や ジョージ・アーノルド・エッシャー(George Arnold Escher)が帰国した後もただ一人残って、1903年(明治36年)にオランダに帰るまで、30年もの間、日本の河川の治水に真摯に取り組み、多くの河川の改修に成功しました。

デ・レイケの功績の一つに、幕末時代からたびたび洪水の被害にあった木曾三川(木曾川、長良川、揖斐(いび)川)の改修計画の立案があります。デ・レイケは改修の相談を受けると、まず1878年に現地を調査して、現在でも木曾川改修の原典といわれる報告書「木曾川概況」を提出しました。次いで、1880年に「木曾三川改修計画」の立案を依頼されると、夏に約10日間かけて三川の上流を歩いて砂防工事をする箇所を指示しました。また、オランダにいたエッシャーに、各種の参考資料(河床上昇問題や河口改修の他、山林の保水・再生、洪水時の山林保護・土砂流出抑制、ダムや山林取り締まり規則など)を、フランス語のものはオランダ語に翻訳して送るように依頼しました。さらに1881年には、木曾の山中を15日間、日に20~30Kmも歩いて調査しました。これらの調査の結果を基にデ・レイケは「木曾川改修計画、三川分離分流計画」を立案しました。木曾川改修工事は、1887年4月に始まり、1900年に完成しました。

デ・レイケは、日本の河川の土砂の堆積や洪水の跡を実際に調査するなかで、河川改修に役立つ新しい独創的な理論を考えました。それは、川の流れる道筋を決める「河道設計」を行うには、単に教科書レベルの水理学を適用するだけでは不十分であり、「洪水の水は、その上層部と下層部とは含まれる土砂質の量が違うので、洪水の水を分流させるにはその点を十分に配慮して計画しなければならない」というものでした。彼はこの考えを、1890年に提出した「淀川改修計画の最終案」に適用しています。彼が打ち立てた理論は、現在の「河道設計」のための「土砂水理学」の理論に通ずるものだそうです。

親友のエッシャーが離日した二年後にリーダ格のドールンも日本を離れたため、デ・レイケは相談相手を失って一時スランプに陥りましたが、やがて「日本で治水に尽くすことは、神様が私に与えた使命である」という信念に目覚めました。それからは、内務省の高官や自分より学歴の高いオランダ人河川技術者にも、自分の考えをハッキリ述べるようになったということです。

河川の治水に対するデ・レイケの基本的考えは、河川の状態を山から海までの全体を通して総合的にとらえると同時に、そこで暮らす人びとの生活についても配慮することでした。彼の書いた「加賀・越中河川港湾視察報告書」や、「木曾川改修計画書」などには、山の緑を守る(木を切らない、植林すること)の大切さとともに、なぜ人びとが山の木を切るのか、なぜ従来からの堤防が貧弱で流域の農民が洪水の被害を受けつづけるのかという問題についての考察や、川の改修で農民が受けるとされる影響などについての記述があります。

このように、デ・レイケは河川を総合的に捉え、公正・冷静に判断して合理的で適切な提言をする技術者として高い評価を受けました。また意志が強く、口が固く節操を守るなど人柄も優れていて、あらゆる階層の人たちと公平に接したため、多くの人びとに親しまれました。明治政府は、デ・レイケの見識の高い率直な意見を評価し、1891年には勅任官の内務大臣技術顧問相談役(今の内務省事務次官)に任命して、デ・レイケに日本各地の河川改修計画の総合的な判断を求めました。

それから約100年後の1987年、木曾三川治水百周年を記念して、デ・レイケのブロンズ像が、愛知県海部郡立田村の船頭平開門(こうもん)公園に建てられました。

2000年は日蘭交流 400周年の記念の年で、4月に天皇、皇后両陛下はオランダを公式訪問されました。ベアトリックス女王夫妻主催の晩餐会の席上、天皇陛下は「おことば」の中で、日蘭交流の一例として、エッシャーやデ・レイケなどのオランダ人技術者が日本の治水工事に活躍したことを話されました。

また、2000年 4月23日の滋賀県大津市の川の砂防えん堤の完成式典に、デ・レイケの孫のマリア・デ・レイケさんが招かれました。この新しい砂防えん堤の近くにも、1878年にデ・レイケが手がけた「オランダえん堤」が残っています。マリアさんは、この「オランダえん堤」に「こんにちは、おじいちゃん」と懐かしそうに話しかけたということです。

以上

参考文献:

『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』 上林好之著 草思社刊
1999年12月 3日初刷

『母なる川 木曾・長良・揖斐』 朝日新聞名古屋社会部編 郷土出版社刊
昭和63年10月31日発行

『青鉛筆』(マリア・デ・レイケさんのこと) 2000年4月24日朝日新聞(大阪)朝刊